槐（かい）

岡井省二創刊

平成27年1月号

平成二十七年一月一日発行　第二十五巻第一号　通巻第二八三号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

飾海老

高橋将夫

初山河形すなはち心なり

絶対に沈むことなき宝船

箱船にも宝船にも乗れぬなり

頭（とう）蓋（がい）を夢が抜け出す獏枕

PDF= 俳誌の salon

正月は古き畳も美しき

母の居るうちは故郷で初笑

白朮の火短き命燃やしをり

裏白の白はるかなるジュラ紀かな

よく回る独楽ほど沈思黙考す

魂は抜けても飾海老しかと

今年また去年の荷物をしよつて行く

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

眼つむりて晩秋の鳥語聴く
黄落期光が翳となる夕べ
ゆきゆきて彼の世へづづく花野かな
穴に入る蛇寂光を纏ひつつ
銀漢や光陰人をふり向かず

加藤みき

もみづりてもみづりて紅散りしけり
鬼の子の夜な夜な俏しゐたりけり
奉書の上にサフランの花乾びたる
小春日や猫と男と板塀と
初鏡にこにこ顔の皺くつきり

中島陽華

しろがねの薔薇のブローチ秋彼岸
鵙日和成金饅頭ふところに
星月夜トルコの影絵ひたすらに
大しやもじ担いでゐたり十三夜
納骨は百歳なりき秋ざくら

竹内悦子

八方に色放ちをり檀の実
天狗湯にあり桃色の木槿かな
枯芙蓉五つに裂けし実なりけり
十三夜二階に人を招きをり
神鳴や烏賊の内臓発光す

PDF= 俳誌の salon

雨村敏子

吾亦紅水にひかりのありにけり
赤ん坊の耳に鈴の音神迎ふ
猩々や十日の菊に乾杯す
槐の木の霊芝なりけり星飛べる
神杉に紙垂の吹かるる月夜なり

本多俊子

掌にのせて淋しくなりぬ石榴の実
銀漢や記憶のふちをかがやかす
しろじろと神の夕風萩こぼる
どの子にも光るものあり貝割菜
晩節はゆるりとすすむ赤とんぼ

近藤喜子

放浪をそそのかしゐる秋の雲
桃の香や母へと時を押し戻す
人になき鳥の明るさ暮の秋
静かなる時やうやくに破蓮
冬近し行かねば先の見えてこぬ

瀬川公馨

三軍を牽く紅のさるとりゐばら
秋の暮乾ききつたる獣道
一芝居打ちて去るべし散りカンナ
秋出水似ても似つかぬ砂州現るる
快晴なり壊滅したる黍畑

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

骨壺を抱きしこと二度露の墓
登高の目鼻を霧の襲ひ来る
百丈の瀧あり霧を浮かび出て
息入れて折鶴翔たす秋の空
影曳いて雪渓を蝶遠ざかる

柳川　晋

大阪の秋刀魚腹より蒲焼きに
秋風を秋波に変へて振り向ける
夜這星らしく上手に隠れける
ハロウィンに駆り出されたる捨案山子
日光に逆柱あり木守柿

岩下芳子

猩猩といふ大杯に新酒酌む
流れつつ大淀の水澄みにけり
栗の虫この世の光まぶしかり
風神の袋に詰めし落葉かな
泥鰌掘るところを鶏に見られたる

近藤紀子

稲穂波雀のかつぽれさかんなり
酔芙蓉しづかに色を変へにけり
置き去りの十二センチの靴晩夏
暮れ方の畦の匂ひや十三夜
供花揺らし色なき風の行きにける

PDF= 俳誌の salon

岩月優美子

澄む水にソプラノの声聞えたり
時空超え銀杏黄葉の厳かに
この先は信ずる道を鷹渡る
色葉散る山は素直に生きてをり
優しさの母の声とも龍田姫

竹中一花

二千人の影動き出す時代祭
床の間に野山の匂ひ吾亦紅
木槿咲く下（もと）にありけり王仁の塚
大根の間引菜買うて魚買うて
鳥眠る森に満月欠け始む

PDF= 俳誌の salon

槐市集

中島昌子

ねこじやらし坊ちやん刈りの女の子
行く秋や格天井の花づくし
覗きたる古書肆の奥の黄菊かな
火祭の掛け声火の粉舞ひ上がる
温め酒一言居士を眠らせる

中田禎子

数珠玉や貴船神社へ道一本
鬼の子やつまずくばかり鞍馬越
金風やお礼参りの石畳
漢持つ花束にある吾亦紅
新米を研ぐ音鼻唄交りかな

中谷富子

初孫と名の付く酒や金木犀
モンローの裾ひるがへす秋の風
ごきぶりを打ちたる胸の鼓動かな
秋深し餃子作りは十八番
冬瓜を煮ておすそ分けすることに

中堀倫子

秋の午後たちよるカフェのありにけり
秋日和きしむベンチにバスを待つ
丹精の手作り野菜秋なすび
荒波の風しほからく秋の海
占ひ師のいい事尽くめ秋桜

PDF= 俳誌の salon

中道愛子

栗めしを志野の茶碗にてんこもり
てのひらに高台寺蒔絵風炉名残
ぐい呑みの並べてありし新走り
黒土の畝を均して大根蒔く
人の手ののどかぬ所烏瓜

橋本順子

鮪のさく紙に角たて包まるる
やはらかく緑に光る秋の蝿
夜の更けて遠き虫の音すぐそばに
山奥の団栗らしき大きさよ
月光や釣りし魚を草の上に

前田美恵子

秋麗や五百羅漢の話し声
狗尾草の黄金の波豊かなる
温酒女逆手の注ぎ上手
秋夕焼缶蹴りの音高らかに
霜月や真意わからぬままなりき

柳橋繁子

義仲寺の南蛮煙管となりしかな
茸山鈴を鳴らして入りにける
爽やかな心経の声若き僧
灯がともる釣瓶落しの連子窓
台風のそなへは確と高枕

山田佳子

焼栗やシンガポールの夜の匂い
秋雲と並びて大阪望みたり（あべのハルカスにて）
地の熱り風雲静めよ秋の雨
雲居たち暫し見逸れる月の舟
秋蝶や日向で生を新たにし

吉田順子

吾亦紅縋るものなき風通す
黄落の中なる幹の照り合へる
山の湖名もなき浮草紅葉かな
羅漢みなはらからの顔うす紅葉
松虫のこゑ加わりて暮色濃し

PDF= 俳誌の salon

槐集

高橋将夫選

ガラス屋が来て秋天を嵌めてゆく　枚方　熊川暁子
歩を合はすことが返事よ十三夜
日本の味を焦がして秋刀魚焼く
手つかみで日を盗みゐる蜜柑狩
菊人形たもと遅れて咲きにけり

爽やかや人は発光しつつ生れ　大阪　有松洋子
月光が滑り台で遊んでいる
時計屋の時はばらばら夜長かな
日を吸うて光を放つ芒原
うそ寒や世界は硝子で出来ている

ややの顔刷りて新米届きけり　江島照美
イケメンの胸に咲く花愛の羽根
削ぎ取られ剥ぎ取られても山粧ふ
執着の形様々負蝗虫
末枯るるものにも華のときのあり

龍淵に潜みひらかぬ扉かな　岡崎　寺田すず江
荒鷹や悟りに遠き目の力
恋を知るこけしに秋思漂ひぬ
なにごともないよと蛇穴に入る
朱の色に黄昏ゆくや芒原

胸の火の灯るやうなる帰り花　吉田順子
人恋うて肩に触れ来る秋の蝶
蔓梅擬なだるあたりに山の音
実南天赤い言葉を地にこぼす
落日に彩変るさま芒原

曼珠沙華若冲の墓燃えてをる　枚方　谷岡尚美
かの山の遠き秋空上田敏
穂の光一夜に増ゆる芒かな
父と子の息合はせたる畳替
薄眉は母よりたまふ菊日和

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

ガラス屋が来て秋天を嵌めてゆく　熊川暁子

ガラス屋が来て、新しい窓ガラスを入れていったのであろうか。ともかく、窓の外には抜けるような秋天が広がつているのだ。「ガラス屋が秋天を嵌める」は、この作者にしかできない表現だろう。

〈歩を合はすことが返事よ十三夜〉の句の「歩を合わすことが返事」と〈手つかみで日を盗みゐる蜜柑狩〉の句の「手つかみで日を盗む」と〈日本の味を焦がして秋刀魚焼く〉の句における「日本の味を焦がす」にみる豊かな感性や〈菊人形たもと遅れて咲きにけり〉の句での眼力には他の追随を許さないものがある。

月光が滑り台で遊んでいる　有松洋子

月光が降り注ぐ静かな夜の公園。誰もいない公園で月光が遊んでいるという。月光が滑り台を滑るように流れる。ユニークで、しかも説得力があり、かつメルヘンチックな一句。

〈うそ寒や世界は硝子で出来ている〉の句、最近の異常気象や噴火など大自然は実に微妙なバランスの上に成り立っている。人の世も同じで、絶えない戦争もバランスの崩れといえよう。そう考えると、「世界は硝子で出来ている」は正鵠を突いている。

〈爽やかや人は発光しつつ生れ〉、〈時計屋の時はばらばら夜長かな〉、〈日を吸うて光を放つ芒原〉の句はそれぞれ人の誕生と、時間と、芒原の本質・核心に迫っていよう。

ややの顔刷りて新米届きけり　江島照美

若い人の年賀状には家族写真の印刷されたものをよく見かける。掲句では米袋か包装紙にややこの顔の刷り込まれた新米が届いたという。喜びがストレートに伝わってくる。

〈執着の形様々負蝗虫〉の句の負蝗虫（おんぶばった）はオンブバッタ科の一種で、雌の上に雄が乗っていることが多い。それも執着の一種というからシニカル。

龍淵に潜みひらかぬ扉かな　寺田すず江

「龍淵に潜む」の季語がよく生かされている。春になるとその扉が開いて、龍は天に登るのだ。

〈恋を知るこけしに愁思漂ひぬ〉変わらぬ若さにエールを送りたい。

胸の火の灯るやうなる帰り花　吉田順子

気持ちの若さはまだまだ健在といったところ。〈実南天赤い言葉を地にこぼす〉の感性もまた若々しい。

父と子の息合はせたぞ畳替　谷岡尚美

畳を外して、運んで、新しい畳を入れる一連の作業で親子の息が合っているという、理想的でほほえましい風景。

〈かの山の遠き秋空上田敏〉の句では、「海潮音」の上田敏がよく利いている。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon